

## 感想文から小論文へ

栗原進

以下に述べる文章は、去る九月十一日、ときわ荘で行なわれた第三回茨城大学国語教育学会での発表の要約である。

さて、本校で全校規模で読書感想文を実施して九年になる。詳細は「高等学校作文指導講座」（下巻 有精堂）に収録されている。当初から現在迄の主な変化をみてみると、まず第一に、年間読書冊数が二十二冊から十一冊に半減した事。読書習慣をつける事が当初の目的であったので、それは一応達成されたとし、文章表現に力点を移そうとしたのである。第二に、主題（主旨）の鮮明化を図った。その為、作文ノートの全面改正を昨年実施して、構想メモ欄と、主題文を書く欄を新設し、文章構成の意識を高めようとした。この事は、大学入試の二次試験で課される小論文対策を念頭に置いた処置でもあった。

五十八年度の国公立大学二次試験で小論文を実施したのは九十四大学一二六学部、私大は一七〇校。入試で、小論文はほぼ確固不動のものとなった観がある。出題傾向をみると、体験を述べる所謂「作文」は減少し、文章を読んで論述する形式が主流になっている。この中には問題文の要約、題名をつける、指示文の説明、与えられた語句を使つての文章作成等も含まれる。更に、資料として、図表、グ

ラフ、写真、絵、漫画等が示され、それに基づいて論述する形式が漸増している。分析力と総合力を同時に併せ持つ論理的思考を問い、加えて、今日性の強い諸問題に、どの位の興味、関心を持っているかを知るのに好都合であるからと思われる。この点で今後参考になると思われるのは社説で、写真や図表等がイラストされているので理解し易くなった。又、朝日新聞日曜版の、高校生のための「現代社会」は、現在世界が抱えている諸問題を取り上げ、その論点の捉え方、具体例や数値の提示、平明な表現等、非常に得る所が多い。

本校では、三年になると小論文を意識して読書感想文のリストを作成し、読んだ本の中から問題点を自ら探し出して、それについて論じるという方法をとっている。以下、書名を内容別、ジャンル別に列挙する。

- (I) 政治・法律 「日本の政治風土」（篠原一）岩波新書
- (II) 経済・社会 「安全性の考え方」（武谷三男）岩波新書  
「自動車の社会的費用」（宇沢弘文）岩波新書
- (III) 思想・心理 「現代日本人の意識」（田中靖政）中公新書

「高校生の日記」（原田茂）中公新書

「孤独と連帯」（小原信）中公新書

「青年期」(笠原嘉) 中公新書

「日本の思想」(丸山真男) 岩波新書

「心の風物誌」(島崎敏樹) 岩波新書

(IV) 社会・教育 「情報行動」(加藤秀俊) 中公新書

「親とは何か」(伊藤友宣) 中公新書

「権威と権力」(なだ・いなだ) 岩波新書

「ことばと文化」(鈴木孝夫) 岩波新書

以上の中から五冊を選ぶ。できるだけ各内容に広く触れる事が望ましいとした。一月からは特別編成授業といって、理系・文系に応じた授業、英数理、英国社をそれぞれ午前中四限を実施して、午後下校するので、あいた午後を希望者だけ特別に小論文の指導が加えられる。更に、年二回、七月と十一月に行なわれる小論文模試の活用もある。二回共に、それぞれ五十人が参加している。

今迄述べてきた試みの中で、現在迄に現われた問題点、或は、改善すべき点を順次挙げてみる。まず気付く事は、現代では何がどのような形で問題になっているのかを、生徒達はみきわめていない事である。社会的関心が低いのではなくて、現象面に底流する問題点を見きわめる力の不足や、問題点のきりとり方はできても、論理的に追究したり、推論したりの力不足が最大要因である。更に、現象面が複雑多岐にわたる為、問題の焦点が拡散してしまっているのである。例を挙げる。

安全性の考え方―原子力発電所の立地―(男子)

原子力というものをまず全世界に知らせたものは、第二次大戦の広島と長崎に落とされた原爆であろう。そのため原子力というたいへん恐いものだと思ふ人たちが多い。それでもなぜ、なお原子力を使わなければならないのか。それは石油がなくなってきたということである。新しいエネルギーに人類は依存しなければならなくなってきたのである。

原子力は、ダイナマイトと同じで、使い方をまちがえればたいへんなことになる。軍事的には決して用いてはならないものである。そこで平和利用として原子力発電がある。平和的利用としての原子力発電ではあるが、はたして安全であるかというと、そうでもない。今までも数例ではあるが事故が起きている。このような事故が絶対には言い切れないので、原子力発電所を作る場合には、必ずといっていいほど、地元住民との間に問題が起こる。まず、放射能がもれるのではないかという問題。しかし我々は毎日、宇宙からの放射線を受けているし、人間自身も放射線を出している。発電所の壁に触れるより人間に触れる方が多くの放射線を浴びる。そう考えると発電所はどこにでも建設されてもよいが、いつでも最悪の場合は考えに入れておかねばならない。被害を最小限にくい止めることができる所、そういう所でなければ原子力発電所を建設してはならない。

石油に変わるこれといったエネルギーをまだ見つけれない我々人類はこのままいったら原子力に頼るしかないのである。そのためには多少の犠牲はやむを得ないことではないだろうか。人類の未来のために。

全文忠実に再現した。主観（主情）的文章、所謂「作文」は書けても、論理的文章（客観）、所謂「論説文」が書けない。これについては出席された市毛勝雄次大助教授から、テーマと題材を区別し、題材を具体的に与えよ、という御指摘をいただいた。この例文でいうと、テーマは、△石油に代わる新しいエネルギー源として原子力は欠かせないものであるが、発電所の建設は安全第一でなければならぬとまとめられる。書き出しは問題提示だからこれで良い。それを承ける第二段で、安全性の定義をしなければならぬ。発電所事故を引用するなら、年月日、場所を明示すれば説得力を増したであろう。次は第三段で、大きく論理を飛躍させねばならないと考える。これがむづかしい。四段構成で文章を書かせようとすると、ここでつまづく。漢詩の転という意識があるため、劇的な転換を図ろうとするからだ。市毛助教教授によると、転という言葉がまずいので、「約」にしようと言われた。これは、第二段で示した具体例を論理的にまとめ、結論につなぐ段落であるという。前例でいうと、発電所の事故で外に漏れた放射能は、毎日

我々が宇宙から飛び込んで来る放射能の量に等しい。或は、レントゲン照射の百分の一の量で、許容量よりはるかに小さいから心配はいらない。又、事故が起こる確率は、発電所の稼働時間に比してきわめて小さいから極めて安全なのだ、といったまとめ方をする。そして結論で、予防措置は、幾重にも講じられている事、原子力発電による発電量は、水力を抜いて火力に次いでいる事、コストは重油を燃やす火力よりも安い事等を述べる。更に、原子力利用は大きな時代の流れとしてもはや押し止められない事、安全性を確保するために、人間の営々とした努力は今日も続けられていて、未来は希望に満ちている、という具合にまとめられる。例文のように、三段構成だと、この論理的まとめの段落がないから、思いつくまま書き列ねた例から、いきなり結論につないでしまおうとするから、「多少の犠牲は止むを得ない」といった危険な結論になってしまう。

諸現象を底流する共通した性質、問題点を見つけ出す練習は今後の課題となる。具体から抽象化へという過程が普遍化につながるわけで、特殊な事例と見えた事柄が、実は我々の身边に照らし合わせてみると、切実な問題を含んでいたのだという認識を持たせる事がどうしても必要なのである。それでないと、粗雑で、無責任な、或は紋切り型の教訓的な結論しか出て来ない。文は人なりという。文を書く人が、どう考えどう生きるかが今問われている。